

華文文学の方向性

—— 試論、求心力と独自性 ——

荒 井 茂 夫

要旨 80年代に入ってから興起した「華文文学研究」は、近年急速に発展する東アジア経済世界の動態の一つであると考えられる。本稿は、中国及び台湾における「華文文学」研究の動向について、改革、開放政策と中華経済圏の興起を背景として概観し、同時に東南アジアの華文文学について、マレーシアとシンガポールを例として、その先端的状況と方向性を検討した。

はじめに

I 華文文学研究の興起と背景

II 華文文学研究のモチベーション

1、台湾の状況

2、中国の状況

III 独自性の方向

1、マレーシア

2、シンガポール

おわりに

はじめに

中国の経済体制改革、開放政策が、1978年に始まってから、すでに15年になる。振り返ると、集権的社會主義下の圧力が緩やかになる現象（例えば、文革否定キャンペーンと被害者の復権、人民公社の解体と個人経営者の出現、とりわけ鄧小平が、経済体制改革は政治体制改革にまで及ぶと言明したこと等。）と同時に、経済の活性化を示す現象（例えば、経済特区の設定、生産請負制の普及や「萬元戸」の出現、そして郷鎮企業の発展等）の同時進行が劇的な変化を見せている。その間、実質経済成長率は78-88年の10年間に平均6パーセントという高い数値を示し、同期間のNIESの成長率に追いつくほどであった⁽¹⁾。

「沿岸地域経済発展戦略」による華南経済と国際経済をリンクさせる構想は、趙紫陽の失脚によって頓挫したもの、対外開放、外資導入という基調に変化はないし、鄧小平の南方視察以来加速されている。

華国鋒、胡耀邦、趙紫陽という三人の総書記の失脚に象徴されるように、数年のサイクルで揺れ動きつつ進展してきた改革、開放路線の歩みは、外部世界との交渉の増大と時間的連続の上に、すでに「一つの時代」⁽²⁾として捉えるのに十分な変化の蓄積を形成している。それは近代化の進行過程の政治、経済、社会的変化の諸相であって、その動態は多様である。ここで取り上げる「華文文学」も、改革、開放の10年の間に、劇的に登場した中国文学研究の動態の一つである。改革、開放のカオスが、中国国家体制の新紀元に結び付いて行くもの

ならば、「華文文学」の登場の10年も、また中国文学史上における歴史的意義を予感させるものとも言えよう。

本稿では80年代に入って、急速に増加した「華文文学」の研究活動について、台湾と中国における現状を概観し、且つ「華文文学の」一翼として大きな比重を占める東南アジアの「華文文学」を例として、華文文学世界の一面を考察する。

I 華文文学研究の興起と背景

台湾と中国における華文文学研究活動は、表1に見られるように、80年代に入ってから、顕著になった。中国では二年毎に、台湾では四年の間隔で定期的に研究大会が開かれている。

80年代初めは、中国の東南アジア研究及び華僑研究が飛躍的に増大した時期だが、それは改革、開放路線下で政策情報を作成提供する中国アカデミズムにおける動態変化の側面であると言える。改革、開放政策が始まった直後の79年から86年までの間に334種、3490篇に上る東南アジア関係の論文が発表されている。表2から、毎年大きく増加していることが分かる。中でも翻訳の占める割合は、増加から下降する傾向を示しているが、これは中国の東南アジア研究が、外国の知識吸収という初歩的段階から、独自の資料を作るまでに向上したことを示すものだ、と自ら評価している⁽³⁾。こうした研究の目的は、東南アジア諸国の開発と発展の経験を学び、中国の「四化」(四つの現代化政策)と改革の参考とし、開放政策によって高まっている外部世界についての情報需要に応えようとするものであり、「中国の経済建設と改革に重大な現実的意義」があると位置付けられている⁽⁴⁾。こうした中で中国の華僑華人研究は「空前の盛況を呈する」ようになった⁽⁵⁾。1981年には初めて専門機関として、暨南大学に華僑研究所が設立され、伝統ある廈門大学の南洋研究所を初めとして、華僑・華人研究に従事する機関は17箇所、70人の研究者を擁するまでになったと言う⁽⁶⁾。

表1 中国台湾における主な華文文学関係会議

年度	台湾	年度	中国
1981	第一回亞洲華文作家會議 (台北)	1982	第一回台灣香港文學學術討論會 (暨南大学)
1985	第二回亞洲華文作家會議 (マニラ)	1984	第二回台灣香港文學學術討論會 (廈門大学)
1988	第三回亞洲華文作家會議 (クアラルンプール)	1986	第三回台灣香港与海外華文文学 国際學術討論會 (深圳大学)
1992	世界華文作家協會第一回大会 (台北)	1989	第四回台灣香港与海外華文文学 国際學術討論會 (上海)
		1991	第五回台灣香港与海外華文文学 国際學術討論會 (広東社会科学院)
		1993	第六回世界華文文学国際討論會 (南昌大学)

華僑、華人研究は10年の空白の後に、一朝にして国策的意義を負わされることになったのである。また、これら機関と全国帰国華僑聯合会を母体として、1981年、始めて華僑研究を専門とする「全国華僑歴史学会」が組織され、85年までの間に開催された学術会議は13回、

450篇の研究発表が行われるほど盛んになった⁽⁷⁾。

中国における華文文学研究の興起は、このように華僑・華人研究が、改革、開放政策の中で国策的意義を持つようになり、にわかに注目され、重点が置かれるようになったことが直接的な要因となっている。さらにその背景には華僑、華人資本の導入を促進する政策と、今では東アジア華人世界の共通認識となっている中華経済圏の構想の出現がある。

表2 中国における東南アジア研究の量的動向 1979～1985

年度	論文総量	専門論文	※翻訳	経 済
79	a 100	b 100	45.9	c 100
81	143	174	29.5	180
81	297	370	27.7	380
82	298	393	36.1	519
83	318	390	38.3	417
84	310	445	34.8	585
85	330	516	30.9	704
86			28.8	

※ 発表総量中に占める割合

a 181篇、b 31篇、c 21篇

出所：劉永焯「中国近年的東南亜研究」436頁より作製

東アジア引いては世界の華僑、華人を巻き込む経済、政治の「圏」的構想の概念は、80年代前半から王賡武教授（香港大学学長）と中国社会科学院の研究者によって討論され、その結果、85年に王氏によって「エクスターナルチャイナ」の概念が提示された⁽⁸⁾。それより以降「中国人共同体」、「亞洲華人共同体」、「中華港経済圏」等、中国、香港、台湾、マカオ、海外華僑・華人の経済的人的交流の緊密化を反映して、東アジアの中国人世界を一つの全体として捉えようとする理論的試みがなされてきた。

一方台湾は、60年、70年代に、海外華僑・華人の支持を獲得するために、さまざまな社團組織を海外に設けた⁽⁹⁾。その間、中国の東南アジア研究がようやく盛んになり始める頃までには、即ち1970年から1982年の間に、台湾ではすでに華僑・華人研究の面では、合計104篇の博士及び修士の学位論文の蓄積ができるほどであった。研究機関としては、9大学、31の研究所が華僑・華人研究に係わっている⁽¹⁰⁾。激動の中国では、海外の華僑・華人に目が向けられなかったばかりか、国内の帰国華僑やその家族が迫害されている間に、台湾の僑務政策は、孫文の革命を支援した伝統を受け継ぎ、国民党に同情する華僑・華人社会の上層の人々を通して着実に行われていたのである。

台湾では91年秋に、蕭萬長経済部長が「大中華共同市場」を形成するという構想を提案した。オリジナルはインディアナポリス大学の鄭竹園教授が89年に発案しものだ。中国、台湾、香港、シンガポールの四者を軸とすれば、日本やアメリカを凌ぐほどの巨大企業を作ることができるが、四つの軸がまとまらなければ、如何に努力しても経済的従属から脱することはできない、という論旨である⁽¹¹⁾。これに対して中国は、政策として採用しないと声明したが、中国人のナショナリズムに訴えるような名称の国際組織に、中国が正式に賛同を表明することは、過去の華僑と現地ナショナリズムとの衝突の歴史に照らしてみれば、非華人の政治、

経済と困難な摩擦を引き起こしかねないことは明らかなからである。むしろ現実に働きかけ、中華経済圏が活発であれば、発展の実を取ることができる。それが中国の現実的政策である。

さらに91年11月、中国共産党高級幹部に対して重要文書が下達され、中国、台湾、香港、マカオ、シンガポール、及び東南アジア華人の力を結合して「大中華経済文化圏」を形成する、という思想が示されたという⁽¹²⁾。こうした意図の有無に係わらず、近年の華文文学研究の興起は、中国文化の中心からみれば、言わば海外に埋もれていた華人の華文文学活動を、中国的連帯の中に位置付け、中国的文化共感の中に刻みつける、或は引き付けるものである。

異なる政治、社会の下に生活し、異なる価値観を持つ海外華僑・華人を、一つの方向に統合し得る要因があるとすれば、それは、中華文化の歴史的共感意識に他ならないだろう。そうした求心力があってこそ、中華「圏」的構想は可能なのである。中華経済圏的構想は、従って、中華文化圏の構想を伴うのが自然だと言えよう。これまで台湾においても、また中国においては更に顧みられることのなかった華文文学研究の興起を、こうした文脈で見直すと、華文文学及び華文ジャーナリズムがエスニックな共感を増幅させる媒体として、大きな役割を果たすものであることは容易に理解できることではないだろうか。

表1の中国、台湾双方で開催された会議の名称の推移から分かるように、台湾では当初から東南アジアの華文文学に重点を置いていたが、中国では86年12月の会議で、初めて海外華文文学を刎上に乗せた。もちろん82年の第一回会議から海外華文文学に配慮する発言はあったが、陳賢茂教授(汕頭大学)が指摘するように華文文学の紹介や研究は「いろいろな原因により門外に放逐され、現在(86年会議)やっと着手されたばかり」⁽¹³⁾といった状況であった。

中国における東南アジア華文文学作品の紹介が増加したのは極めて最近のことである。91年に中国文聯出版公司から「世界華文文学精品」(三巻)が出版され、現在「新華文学叢書」(中国文聯出版公司)の出版が計画されている。このほか単行本が散見されるだけである。これより以前は、85年に汕頭大学の〈台湾及海外華文文学研究中心〉から季刊「華文文学」が出版され、作品紹介や研究成果が徐々に発表されるようになっていたが、限られた範囲のものであった。対象を広げた一般的雑誌としては、86年に「四海」(中国文聯出版公司)が発行され、新華書店を通して全国、また海外にまで出されるようになった。

一方台湾では、83年にはすでに柏楊の編集により、1965年から1980年までのシンガポールの華文文学作品及び理論と批評を集録した「新加坡共和国華文文学選集」(四巻)が出版されている。この選集は、方修の「馬華新文学大系」(十巻、1919年から1942年の間の、マレーヤの華文文学各ジャンルの作品、理論と批評を集録し、解説を加えている。1971年から1972年にかけて出版された。)及び「新馬華文文学大系」(八巻、1945年から、1965年にシンガポールがマレーシアから分離独立するまでの間の作品、理論と批評、解説。1971年から1975年の間に出版された。)という二大大系を継いで、その後の15年間の総集として位置付けられ、東南アジア華文文学研究の三種の基本文献の一つとなっているものである。東南アジアには台湾で教育を受けた華文作家も多く、本来台湾との関係が深いことが、こうした意義のある叢書の出版の背景となっている。

中国、台湾という中華的世界の二つの軸において、この十年の間に華文文学研究が盛んになり、定着していることは表1から分かるが、これら以外にも様々な活動が展開されている。例えば、89年には陳若曦の呼かけにより、パークレーで「海外華文女作家聯誼会」が結成さ

れている。陳若曦によると、中国の作家や研究者から「何故組織化しないのか」「団結こそ力となる」、と強く勧められた結果、一年の準備期間を経て、85人の華文女流作家が呼びかけに応じてできたものだという⁽¹⁴⁾。また92年10月にはカリフォルニアの西来寺で第二回大会が開かれ、第三回大会は、今年、マレーシアの戴小華副会長の手でクアラルンプールで開催される。

92年11月台北で開催された＜世界華文作家協会第一回大会＞では、李登輝總統が開幕の挨拶に立ち、長年海外華文作家の組織作りに尽力した陳紀滢亜洲華文作家協会会長に、「特殊貢献獎」六十万台湾元が手渡された⁽¹⁵⁾。第一回亜洲華文作家協会を基として組織された亜洲華文作家協会の歩みが、世界的組織作りの基礎となっているのである。また李元簇副總統の主催で歓迎会が開かれ、さらに最終日は赦伯村行政院院長によって閉幕されるなど⁽¹⁶⁾、台湾では華文文学の興起を政治が支えるという姿勢が直截に表現されている。華文文学の世界的な広がりに対する政治からの期待の大きさを察知することができる。

Ⅱ 華文文学研究のモチベーション

それでは中国、台湾において、華文文学はどの様に位置付けられ、どの様に考えられているのだろうか。

1、台湾の状況

亜洲華文作家協会の陳紀滢会長（国民党評議委員）は、「アジア華文作家の使命と努力の方向」をテーマとして開催された第二回会義において（マニラ）、活動の目的について次のように述べている。「我々は作品を通して団結を強め、組織を通して中華文化をアジアに広め、華文文化によって「民有、民治、民享」の民主政治を世界に宣揚する。」⁽¹⁷⁾これに対して許以豊僑務委員会第二処処長が、華語教育と華文文学の関係の重要性を強調し、若い華文文学作家が育成され、中華文化の優良な伝統が海外に根付き、成長することを願う、という政治の側からの期待を述べている。即ち、海外の中華民族は、国籍や身分が異なろうとも皆中華の血統であり、海外で世代を重ねて行く過程で、華語と華文と中華文化の伝統を受け継いで、正正堂々の「黃炎子孫」を作るためには、華語教育の振興による中華文化の薫陶が不可欠だ⁽¹⁸⁾、ということなのである。

この会議ではさらに次の四点がアピールされた。1) 自由と正義、民主を尊ぶ華人作家は一致団結し（団結）、2) 創作は中華の優雅な正統の文字に統一し（文字の統一）、3) 思想、意識においては中華文化を宣揚することを職責とし（中華文化の宣揚）、4) 自由民主と世界の潮流に合った華文作品を世界文壇に送り出す（世界的位置付け）⁽¹⁹⁾。換言すれば、繁体字による創作の統一、即ち中華民国の思想を伝える中華文化を宣揚し、非共産主義的世界の中に自らを位置付けるということである。経済的成功と優越を背景に、政治的実体としての台湾の国際的認知を目指す台湾政府の努力に合致するものであり、その点からも華文文学は、中華文化の共有に基づくエスニックな共感を増幅させるための役割を担っていることが分かる。またそのための団結、組織化とすることができる。

「亜洲華文作家」誌（1984年創刊）は、第七期（85年）と第八期（86年）で特集を組み、東南アジア各地の華文作家の報告を紹介している（台湾8名、香港3名、フィリピン13名、タイ、マレーシア、シンガポール各3名、ベトナム、日本各2名、韓国1名）。これらには素朴な、

或は強烈な中華文化に対する求心の意識が共通して表現されている。しかし華人は東南アジアではあくまでマイノリティーであり、圧倒的多数の非華人の存在と感情を考えると、どうしても排華の歴史的不安が残る。例えば、「中国の文字、文法は特殊で、それによって儒教の思想が伝えら、特別な民族意識が幾千年来中国文化の永遠の命脈となってきた。それが英語、英文に押され、大陸では文字まで醜く変形している。華文は中華文化の命脈であり、華文作家が団結してこそ正統思想、中華文化を宣揚できる。」⁽²⁰⁾と言うとき、政治の側面からみれば、華人社会の中にとどまる限りは、華僑・華人の政治的アイデンティティーを確保するための当然の強調と言うことであろうが、東南アジア非華人のナショナリズムにとっては、そうした華人の意識の発露のあり方次第で、感情的な衝突につながりかねない華人の文化的優越意識の増幅という、危険な側面を潜ませていると言えよう。従って、東南アジア華文作家の政治的アイデンティティーという視点から見直すと、中華文化に対する帰属感や忠誠は増幅されても、台湾に対する政治的アイデンティティーには容易に転化し難いと思われる。この事は中国についても同様に言えることだろう。世代を重ね、二世三世の時代になった今日の東南アジア華人の政治的アイデンティティーは、ほとんど居住国に向かっているのである。実際マレーシア華文作家協会会員を対象に調査を行った結果では(91年)、回答者112名のうち89%がマレーシアに対する政治的帰属感を示しており、中国に対しては4.6%に過ぎなかった。また、マレーシアやシンガポールからの参加者の論説には、華語教育や伝統文化の保持の現状と問題を報告しても、中華文化の優越性を強調する表現はほとんどないし、トーンが低い。

それではいったい華文文学とは台湾においてどの様に定義されているのだろうか。陳紀滄会長は、将来インドネシアやブルネイ、太平洋地域にまで拡張し、「およそ中国人のいるところには華文文学が存在するようになることを願う」と発展を展望してはいるが、華語による創作が華文文学であるという先験的な認識を示すにとどまっている。一方創作の方向については、同会長は次のように示唆している⁽²¹⁾。

- 1) 我々は第二次産業革命の時代に望んでいる。現代科学文化の様々な側面を反映した現象、生活や社会の変化を描く。
- 2) 各地の文芸活動状況を伝えなければならない。また、各地の非華文作家の活動を紹介して理解を深め、非華文作家とともに現地の文化に貢献することも夢ではない。
- 3) 様々なジャンルの作品がなければならない。
- 4) 文には時代の背景があり、文学と歴史は分かつことはできない。歴史的認識を与える文章は、いかなる時代にも必要であり、純粋な文学作品ではなくとも人を引き付ける文章は文学に等しい。華人、非華人の歴史文化を問わず、意義のある題材は等しく創作の方向にある。

四者の中でも海外華文文学、とりわけ東南アジアの華文文学に関して重要な点は、中華文化宣揚を目的とする華文文学が、非華人の文化、社会と接する点である。華文文学の中心が中国文学であるならば、海外の華文文学が持っている特殊な環境についての配慮がなければ、華文文学世界の構造は描かれない。それが具体的にどの様に認識されているのか、いま一つ明確な記述がないようである。ただ、フィリピンの林婷婷女史が余光中の言う「辺縁文学」という言葉を借りて、海外華文文学を位置付けていることが、共通認識だと言えよう。即ち、「海外華文文学という『辺縁文学』を中国文学の一つの主流にし、共同して華文文学を世界

文壇に送り出す、」⁽²²⁾という文脈で華文文学世界の興隆を展望し、同時に非華人社会、文化と接する特殊性が「地方的色彩に富んだ作品」、「独自の風格」を生み、それが台湾の国内的水準に達すれば、海外華文文学と中国文学の伝統を一つの脈絡にまとめることができる⁽²³⁾、と述べ、中国文学の「辺縁文学」としての海外華文文学の位置と、独自性を持った海外華文文学の発展の可能性を示唆している。独自性あるいは独立性を形成した東南アジアの華文文学は、中国文学とともに華文文学世界の一つの軸に成り得ることを意味すると理解できる。そうならば、東南アジアの華文文学は、中華文化の「辺縁」性の一つではあっても、中国文学の「辺縁」ではなくなると言えるのではないか。東南アジアの華文作家が「中華文化の伝承者」であることと、彼らの華文文学が中国文学の「辺縁」であるかどうかは、分けて考えなければならない問題であろう。

「亞洲華文作家」誌の特集に掲載された東南アジア華文作家の論説に共通するのは、中華文化の共有と、その伝承者としての自覚であり、それが華文文学を支える根本にあることが理解できる。それはまた同時に中華経済圏の構想を支える文化「圏」的共感意識の世界を十分察知させるものだ。陳紀滢会長の言葉を借りるならば「今日、アジアの経済は日毎に繁栄しており、アジアの四小龍の中に、我々会員の多数が属している。この故にアジア文化は世界の中で、すでに重要な地位を占めているのである」⁽²⁴⁾とすることだが、この「アジア文化」が中華文化であり、繁栄の原動力として認識されていることは言うまでもない。

2、中国の状況

記述のように中国の海外華文文学に対する注目は遅く、研究の蓄積も少ない。1982年6月の第一回台湾香港文学学術討論会は、明らかに、97年の香港返還、さらにはマカオの返還と中国の統一を前景として、台湾、香港の文学を中国文学の組成部分として位置付け、研究の遅れを取り戻す試みであった。返還が政治日程として明確である以上、また開放政策によって、香港及び香港経由の自由世界の文化の流入と影響が明らかである以上、従来の政治優先の文学観によることなく、香港、台湾、中国の知識人の意識世界の調整が行われる必要があるのは当然である。加えて、社会主義市場経済の建設と中華経済圏の構想とのリンクが明らかであるからには、中華「圏」に位置付けられる海外の華僑・華人の文学活動に対する認識を深めるために、研究の必要性が強調されるのも当然である。

中国では台湾のように、最高政治指導者が直接登場することによって、政治的側面が演出されるような現象はみられないが、政策的背景が一連の研究活動の背景にあることは明らかであろう。中国における主張にも、エスニシティの強調が中核になっていることは、やはり台湾における場合と同じく、中華的連帯の中に位置付け、包摂しようということである。そうした考え方は、例えば次のような表現の中に代表されよう。

「海外同胞は祖国統一の実現を願っている。台湾人民も、香港、マカオ人民も我々の同胞であり、海外僑胞も我々の同胞だ。三胞、これこそ海内外に生活している中国人の最大の同、であり、『炎黄子孫』として中国が統一されないでよい理由は何もない。台湾、香港文学は中国文学の一部であり、母体文化との間は断ち切ることのできない骨肉の繋がりがあ

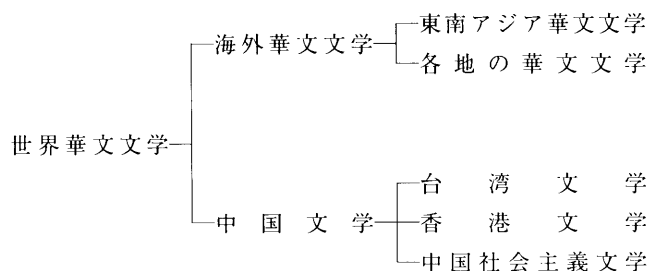
る。作品の紹介と研究を通して、相互の関係を拡大し、理解を深めなければならない。」⁽²⁵⁾
 重点は当然台湾、香港の文学に置かれているが、「中国文学の一部」とであるという点を除けば、そのまま海外の華僑・華人の文学活動についても当てはまることである。そして「文

学を通して、これら地域の動向を理解し、我々の歴史的使命をよりよく完成させることは、大陸人民の共通の要求である。」⁽²⁶⁾と認識されている。

こうして80年代中頃から、中華「圏」的構想の興起を背景に、海外華文文学が注目されるようになって来るのだが、1986年2月の「四海—港台海外華文文学—」の創刊が、そうした傾向を最もよく象徴している。同誌は帰国華僑作家の秦牧が主編者となって、中国文聯公司から発行されている文学雑誌で、海外の華僑・華人作家の作品や活動を紹介し、交流することを目的としている。彼によれば、中国は鎖国の時代が過ぎて、全ての窓を開放して世界を観察し、世界に理解してもらおうとしている時であり、これまで華僑・華人に対して視野が狭く、理解が不足していたことの反省の上に、「広く世界の華文文学の動向に関心を向けている」と言う。そして華文文学専門誌として唯一中国の内外で発行されている同誌の存在は、まさに「海外華文作家を支持することになる」のである。

秦牧は、華文文学の興隆を英語文学、フランス語文学、スペイン語文学等の世界的広がり に比擬しており、華文文学の定義についても林婷婷より具体的な姿を提示している。「中国の社会主義文学と台湾、香港の地域的特殊性を持つ文学が、中国文学全体を構成し」、「中国文学は世界華文文学の中で重要な地位にあり、世界華文文学全体の発展に影響を与える」と言っているように、華文文学を上位に置いて、図1のように想定していることが分かる。

図-1



そして86年12月に開かれた第三回討論会から⁽²⁷⁾、初めて海外華文文学がタイトルとして登場したのである。この会議では「海外華文文学の歴史と現状及びその特色」と題するセッションが開かれ、研究発表、討論が行われた。会議での基本的な認識は次のようにまとめられている。

- 1) 華文文学研究の興起は、中国の開放、改革の進行にともない外国との交流が盛んになり、海外華文文学という新領域が注目されるようになったことによる。情報化社会は人と人との距離を短くし、地球的な意識で思考しなければならない時代になっている。
- 2) 華文文学は中国文化と外国文化の直接的接触と相互作用を具体的に表現している場だ。
- 3) 五四以来の新文学運動は、東南アジア各国の文学、特にシンガポール、マレーシアの華文文学に反映されているが、すでに中国文学の支流ではなく、現地の生活に根ざしたシンガポール、マレーシアの民族文学の構成単位となっている。
- 4) 華文文学は文化移動研究の重要な面を持ち、影響関係の発生や可能性を分析することは比較文学研究にとって重要な課題となる⁽²⁸⁾。

これらの中でも定義に係わる(3)の認識が最も重要だが、台湾の活動には遅れながらも、あるいはそれを踏まえて、中国では、まず華文文学の定義を明確にする議論がなされたのであ

る。

東南アジアの華文文学は、中国文学から離れた存在として、各国の国民文学或は民族文学の構成要素として位置付けられた。従って、「辺縁性」は、共通の言語を使用し、異境に住み、中国に郷愁を抱きつつ創作する、と言うだけでは説明することはできない。異境で世代を重ねた華人作家の帰属意識は在住国の社会風土にあり、創作意欲は在住国の思潮の中に生きているのである。中国文学と離れた華文文学の、創作における中国文学的伝統とは「中華文化の伝承」者としての意識であると言えよう。

さらに華文文学のこうした定義を越えて、「華人文学」という、より包括的概念を主張する意見が、同セッションで提案されていることは、海外の華僑・華人文学の将来の方向を示唆する点で興味深い。「華裔後代が、英語などの外国語で創作し、華人の生活を反映した作品や、外国人の手による華人の生活を描いた作品までも華文文学に含めれば、華人文学は永遠に消滅しない」(禾黛云、深圳大学中文系主任)と考えるものだ⁽²⁹⁾。亜洲華文作家会議でも華語教育の重要性が論じられているように、華僑・華人社会の華語教育の衰退は確かに大きな問題となっている。中華文化伝承の道具である華語の衰退は、中華経済圏の世界の求心力の縮小につながるが、禾黛云の考えるように、華語に拘泥せずに中国人としてのエスニシティーのみを紐帯とすることが可能だとするならば、中華「圏」的概念を拡張し、強靱にする可能性につながると言えよう。

87年5月に、中国で初めて純粋に東南アジアの華文文学をテーマにした学術会議(「第一屆東南亞華文文学討論会」廈門大学)が開催されたのは、華人世界で最大の人口規模を誇る東南アジアの華文文学が、とりわけ重要視されているからである。また中国で行われたこの会議が、フィリピンの「菲華文聯」の名誉会長莊鼎水氏の資金援助で開催されたことは、中華文化圏的活動を象徴していると言えよう。

この会議では、東南アジア華文文学は、もはや世界文学の重要な構成部分になっていると位置付け、期せずして発表者の多くが、華文文学の定義について言及したという⁽³⁰⁾。その結果は次の三点にまとめられている。

- 1) 華文文学は中国本土以外の、中国語を創作母語とした、文学であり、中国文学とは相対的なものである。即ち、中国以外の地域の華文文学は、みな独立した民族文学としてその他の民族文学とともに、その国或は地域の欠くことのできない構成部分である。
- 2) およそ中国語を創作の媒介としている文学は、等しく華文文学と称する。華文文学も英語文学、スペイン語文学という名称と同様に、一つの語系文学であり、世界文学の主要な一種であり、中国文学は華文文学の重要な構成部分である。
- 3) 華人在住国が独立する以前の華文文学は、中国僑民の文学であって、その点、本質的には中国文学の支流であると見なすことができる。しかし独立後の華文文学は、中国文学からは独立した、別の国の文学の有機的成分なのである。

正しく秦牧の考え方を明確にしたものであるが、ここに来てようやく華文文学の定義の詳細が鮮明になったと言えよう。この定義に係わる重要な議論として、この会議においても、「華人文学」という概念が提示された。ただ86年の第三回討論会で出された際と異なるのは、華文文学を「華人文学」改称すべきであると、一步踏み込んだ意見が出されたことである。「華人作家でありさえすれば、その作家が中国語を使うにせよ、或はその他の言語文字で創作するにせよ、みな華人文学と称すべきだ。」⁽³¹⁾という。エスニシティーのみを枠組みの中

心とした考え方は根強いものがある。91年、泉州大学に「華人文学研究所」が設立された際には、「他の研究機関はほとんど海外華文学研究所と命名しているが、泉州では華文学とした。」と確信をもって宣言している。やはり海外華人の華文による創作ばかりか、華語以外の文字で書かれた作品も含めるとするものだ⁽³²⁾。しかしながらこうした考え方は、示唆的であっても、あくまで試みの域を出ないものだ。海外華人は華文を使って創作するのが一般的であり、華文学と称しても、中心となるのは華文文学である。また華文文学は歴史的な蓄積があるが、華語以外の言語で書かれた華文学の蓄積は、概念を裏付ける程の蓄積を形成するに至っていない。従って、ハン・スーイン一人の位置付けも、この「華文学」では容易に確定できない。

中国、台湾双方を軸とする華文文学研究を通して、中華文化を共有する歴史的共感意識、或はよりエスニックな表現を借りれば「同祖共宗の骨肉の情」が中心にあること、また、文学としては中国文学から離れた存在としての華文文学、と言う二点を抽出することができる。東南アジアの華文文学は「伝統文化の根を、別の文化土壤に移植したものであり、その果実は自然に地域的特色を示す。」また「現地社会に取材し、華人独特の境遇や運命、心理を描写し、強い地方的色彩と熱帯の生活気分を持っている。」⁽³³⁾それが中国文学との大きな相違点であり、東南アジア華文文学の独自性なのである。

Ⅲ 独自性の方向

東南アジアの華文文学が注目されるようになってから、87年に到って漸く中国文学からは独立した別の国の文学の有機的構成部分であると言う定義が示されたが、こうした考え方は、実は二十年も前から研究者の常識となっているものだ。しかし、近年の「研究は始まりに過ぎず、巨視的、微視的研究を問わず、開拓の分野は大きい」⁽³⁴⁾とする中国の研究状況にあっては、まず始めに明確にしなければならない問題であった。またこうした研究の中から新しい視点として提示されたのは、「辺縁文学」とする見方と、「華文学」という概念である。

華文文学を中国文学の「辺縁文学」であると位置付ける試みは、台湾ばかりでなく廈門大学の潘重璣氏も取り上げようとしているが⁽³⁵⁾、「辺縁文学」が、中国文学に属する台湾、香港の文学、及びアメリカに定住する一世華僑・華人作家の郷土志向までは包摂できても、すでに七十三年の歴史を有するマレーシア、シンガポールの華文文学（五四運動の影響を起点とした場合）の歩んで来た曲折と独自の意識を包摂することは不可能であろう。例えば、シンガポールの若い詩人梁文福が、香港新界の中国国境を望んで「十五分間、数千年の辺縁を見つめている、何が見えただろうか、もとより祖先の故郷を思っているのではない、この南洋に生まれた少年は、神州の一景一物何も見たことがない、郷愁など湧きようもない、」「中国の山河や風俗人情も、彼には大事なことはない、大事なことは伝統の中に求められ、世代相伝わる珠玉は辺界の彼方の大陸でなければ得られないものではない、大陸に生活している人々でさえ、みなそれを発見し、大切にしようとしているわけではない」⁽³⁶⁾と語っているのは、中華文化的精粹の伝承と現実の中国に対する意識的乖離である。あるいは中華文化の「辺縁」性と中国文学状況との距離とも言えよう。「辺界人」というこの文の題は、まさに象徴的である。同じく華語を創作言語としているが、シンガポール人梁文福にとって、文化の精粹は伝承しても、現実の中国や中国文学との脈絡はない、と言うことなのである。この散文が書かれた1985年のシンガポールはすでに新興工業国に成長し、国民は発展を享受し、

成功を自負する時代である。作者は23才、国の経済発展とともに成長した新世代の華人なのである。

1、マレーシア

マレーシアとシンガポールにおける華文文学の歴史的転換点は、第一に、1947年から48年の僑民作家をめぐる論争がある。これはマラヤ華文文学の独自性を主張する作家と、胡愈之等の中国作家に代表される、マラヤ華文文学をあくまで中国文学の延長として捉え、中国の民族解放を主題とした僑民文学を主張する作家知識人との論争であった。結局マラヤ共産党の武装放棄による非常事態の発令により、胡愈之等の中国作家は、つぎつぎとマラヤを離れ、中国に帰って行った。1945年、中国共産党が勝利してからは、植民地での取締りは一層厳重になり、盲目的に中国文壇に従う論はなくなり、政治熱から醒める一方で、マラヤの華文文学はマラヤの生活に題材をとった独自の方向に発展して行ったのである⁽³⁷⁾。

第二は、シンガポールのマレーシアからの分離独立である。マラヤ華文文学は、1965年以後、マレーシア華文文学（「馬華文学」）とシンガポール華文文学（「新華文学」）に分かれて、各々の方向に発展して行った。シンガポールの華人人口比は、総人口207万人中、166万人、80%（1970年当時）、マレーシアでは総人口1044万人中、華人人口は338万人、34.4%（1970年当時）であった。両地は、華文文学世界では中国、台湾に次ぐ規模であると言えるが、両地の非華人人口に対する華人人口比の差が、1965年以降今日までの発展の違いの根本的な原因となっているのである。華人が圧倒的多数を占めるシンガポールでは、当初から華語は公用語の一つに位置付けられている。かつて50、60年代には、華語教育出身者が反政府運動の中核と見なされ、且つ英語教育が社会的上昇の必須の条件であったため、華語の社会的地位が低下した時期もあった。しかし80年代に入ると、華語による華人の国家的アイデンティティの形成を目指して「方言をやめて、華語を話そう」（「多講華語、少講方言」）という運動が展開され、同時に華語の経済的価値の上昇と相俟って、今日では、華語の社会的地位は大いに上昇している。また華人教育の理念に儒教倫理が採用されていることは周知のことである。

マレーシア人のマレーシアをスローガンとしたリー・クワンユーのPAP（人民行動党）は、シンガポールの分離独立以後は、シンガポール人のシンガポールをスローガンとして、各人種言語を平等に国語として位置付け、各々の言語による創作は平等に国家の文学を構成する部分となったのである。

一方マレーシアでは、マレー人の華人に対する歴史的不満と潜在的危機感が、1969年の5・13人種暴動となって爆発した。事件を收拾したアブドル・ラザクが首相となり、憲法を改正して、スルタンの地位や国教としてのイスラム教、また国語としてのマレー語、マレー人の特殊な地位（公務員、職業ライセンス、教育におけるマレー人の優先権等）に対する批判を禁止し、マレー人優先政策を鮮明にした。

これに対して華人保守政治の中心勢力であるMCA（マレーシア華人協会）は、マレー人政治との妥協に、華人の利益を守る方向を見出した。そしてUMNO（統一マレー人国民組織）を中心とする国民戦線（BARISAN NATIONAL）に参加し、与党連合政権に連なった。一方旧PAP系の華人は、マレーシア人のマレーシアをスローガンとしてDAP（民主行動党）を結成し、人種間の公平を主張する野党の一大勢力を形成して行ったのである。

このように人種的軋轢の大きいマレーシアで、華語は当然国語ではない。従って、華語教育も国の政策の枠外に置かれているために、独立中学校（華人の私立の中、高校）卒業生の進路にも自ずと制約がある。それが入学者の減少の原因の一つとなっている。華語教育の衰退は、華人の団結や華人文化の保持に影響する問題として、恒常的困難の一つになっている。独立中学の卒業生を吸収するために計画された独立大学の設立構想は、マレーシア華人社会の大きな運動となったが、結局マレー人政治の側からの圧力が主な原因となって挫折した。このように華人文化の自由な表現が人種間の摩擦の原因になったり、或は華人が華人文化保存の面で、人種的圧力を感じ受ける出来事は実に多い。例えば、91年にマレーシア華人文化協会の発起で「華人文化城」（華人の歴史的文物、記録を展示し、文化遺産を保存し、建国の功績を顕彰し、同時に観光の名所にする計画）の設立が呼びかけられた際、UMNOが直ちに反対を表明し、多民族国家の人種間の調和を乱すものだと主張した。MCAが500万マレーシアドルを投入すると宣言したこの計画も、結局最終的にはMCAの林良實会長とマハティール首相との話し合いによって、各民族（マレー人、華人、インド人）が参加する形で妥協に達し、発起案とは名実ともに違う結果となった⁽³⁸⁾。

華語が国語として位置付けられず、またマレー文化が優先されるマレーシアにおいて、国家文学は当然マレー語文学である。華人の帰属意識の強さとは裏腹に、華語が国語でない限り、如何にマレーシアの社会、生活、風土に根ざした創作が行われようと、法的地位に変わりはないのである。そのため華文文学の振興も華人社会自体の循環の中で行わなければならない。と同時に、華文文学には華人社会の文化運動を推進する役割も負わされているのである。従って、マレーシア華文文学文壇における評論批評活動は、また華人の思潮を強く表現するものである。そうした視点から、近年最も先端的文学思潮として、黄錦樹氏の論説は興味深く、示唆に富む⁽³⁹⁾。結論から言うと、黄氏は「馬華文学」という略称がマレーシア華文文学を指すことは常識になっているが、本来別の意味も含まれるものであり、「馬來西亜華人文學」（マレーシア華人文學）を正式な名称とし、「馬華文学」はその略称とすべきだ、と主張するのである。この一字の差の意義は全く異なるもので、マレーシア社会の本質的な多元性を考慮すると、文学史の領域で、基本的で且つ必ずしなければならない方向性の調整であり、時間的脈絡の中で、その重要性が顕示されて来ると言う。その論旨を以下に紹介する。

華人社会を憂慮する知識人に、華人としての「純化」を堅持する理由を与えたのは、マレー人を中心とする同化政策が一方的条件の同化主義によるためであったからだ。その結果、人種の両極化現象が継続して存在するようになった。しかしマレー人が政治、経済、社会の中心で、マレー文化が主流であるからには、華人社会がマレー文化を受け入れなければならないことは否定できないことだ。

華人が華人として認識するのは内からの自覚によるものだが、その華人にもさまざまな類型がある、ほとんど同化しながらも独特の言葉、風俗を持つババ華人もいる。

その類型の指標は、教育、言語である。創作には熟達した言語が使用されることになるが、主要な創作言語としては華語、マレー語、英語の三種があり、将来マレーシアの文学史の全貌を描こうとすれば、これら三種の華人文學が出現することを想定しなければならない。華文文学という名称は華語による創作に限られ、狭隘である。現在華文文学が量的に最も多い

が、これらはほとんど強烈に中国文化に帰属感を抱く「純化、傾向の華人」と言うことになる。こうした観点からみると、方修等の文学史家が「馬華新文学」と称して、五四運動の影響からマラヤの華文文学を論じているのは問題である。マレーシア華文学がそれ以前に存在していると言う伝統を忽略しているのである。旧文学の存在を持ち出すまでもなく、注目すべき価値のあるババ華人の文学が存在するのである。

また現状では、国民中学系（政府系、マレー語教育）と独立中学系という二元的教育体制の下で、華人の言語習得も分裂しつつある。国民中学に入学する華人子弟は不断增加し、マレー語が華人集団の中でも力を持つようになってきた。また、徐々にマレー語で創作する華人も現れている。これは歴史的必然である。華人の「民族の大義、などによって非難したり、否定すべきではなく、むしろ奨励すべきことである。

このように「マレーシア華文学」と改めた上で、マレーシアの華文学を検討し直せば、さらに将来の展望が開けることになると言うのである。いつまでも「人種両極化」の状況下で、華人としての「純化」に固執するのは閉鎖状況に陥るばかりだ、ということになろう。黄氏は名称を改め、新たな概念によって将来を展望することによって、閉鎖状況からの離脱と発展の方向を見出したのである。黄氏が言うように、現状では圧倒的華文文学作家から批判されるであろうこの論は、実際、時間が証明する事になるかも知れない。ともあれマレーシア華人作家のこうした苦悩が、中国文学の「辺縁」であるわけではない。マレーシア華人独自の苦悩ではあるが、しかし中華文化の「辺縁」の苦悩と言うことはできよう。文学世界に限らず、マレーシア国民としての華人全体に共通する問題だからである。

2、シンガポール

人種的圧力をさほど意識しないシンガポールの華人文壇では、華文文学が注目されている状況を踏まえて、来世紀の華文学を展望する試みがなされている。

シンガポール大学中文系の王潤華氏は、「世界的に大きな華人経済圏が出現しているが、華人の文学的成果も華文、英文、その他の言語を問わず、一堂に集めれば相当な規模にまとまる」、そして将来「華文学共同体が出現することは、二十一世紀世界文壇の新現象となり、必ずや大きく成長し、重視されるようになる。世界華人作家の一人として、シンガポールの華文作家も英文作家も、その重要性は自ずと高まって来る。」「シンガポールは自由な政治環境、華語と英語のバイリンガリズムを背景とする良好な条件を備えており、世界的華人作家の活動と研究の中心となることができる。」「これまで我々は、世界の華文文学に多大な注意を払ってきたが、今日、将来を見据えて、我々は世界華文学の只中に入り、且つシンガポールをその発展と研究の中心にしよう」⁽⁴⁰⁾と声高らかに宣言している。

シンガポールの発展の原動力となった華人の自信が、明るく響くのを感じることができる。しかし王氏はシンガポール華文学の名称を変えることは考えていない。アセアン各国の文化当局が編集した「アセアン文学選集」の中に集録された華文文学が、シンガポールの華文学だけであることを自負しているように、中国領土外で、唯一華語による文学が国家文学に位置付けられているシンガポールでは、改称など考えるまでもない事なのである。しかし、いったい「一堂に集め」、「相当な規模」にまとめてどうしようと言うのだろうか。また「華文学共同体」とは何か、また何のために、どの様な役割と意義を持つのだろうか。国家的

成功の精神的高揚は感受されるが、同時にこうした疑問が起こるのを禁じ得ない。泉州大学の「華人文学」と同様に、むしろ中華文化圏の求心力の渦潮の高まりを感じさせるものだ。シンガポールの経済的成功や中華経済圏の建設的展望を背景とした、情緒的表現としては理解できるが、シンガポール華人の文学状況の現実とどの様に具体的に連関しているのか、王氏自身も述べていない。中国における「華人文学」の概念が、既述のように、世界の華人の文学活動をエスニックな次元の枠組みの中にあくまでも統合的に位置付けて、分散消滅させないようにしようとする意図という点で理解されるのに対して、王氏の言うところは、いま一つ具体性と関連した理解が困難なのである。

黄錦樹氏の主張する「華人文学」は、凝縮された苦悩を絞り出すように解こうとする議論であり、マレーシアの華文学ばかりでなく、華人社会の本質的問題に対して、現実性のある方向を示している。王氏の天真な論との相違は、やはり1965年に分離した後の経済的発展の違いと、人種政治的環境の圧力の差によるものであろう。

シンガポールの華人社会は、1965年以降人種の圧力から解放されたばかりか、中華的文化意識も正当に位置付けられ、経済的成功が華人に自信を与え、国家的アイデンティティーがさらに高まっているのである。そうした点から言えば、シンガポールの華文学状況を代表する意識は、「華文学共同体」を謳うような情緒的連帯にあるのではなく、発展や開発による様々な変化の相を表現する所に求められるべきだろう。そうした作品は数多いが、中でも、先に引用した梁文福は、自身も国の発展とともに成長した新世代の作家として、新旧のシンガポールを対比しつつ、感傷の中に成功の息吹を巧みに描き出している一人だ。彼の散文「最後の牛車水」を以下に抜粋する。(「牛車水」とはモスク・ストリート、パゴダ・ストリート一帯の所謂チャイナタウンの俗称。古くから華僑社会の生活の中心であったが、建物の老朽化と景観上の問題から再開発の対象となった。)

私は、敬虔に近い心情を抱きながら、物売り、屋台の光と喧噪の中に入って行った。／私は、牛車水について何も言えないし、嘆息する資格さえないが、牛車水は私にとって誇らしい名前だ。父の幼年を刻み、祖父の奮闘を刻み、無数の先人の多くの辛酸、努力、悲哀や喜びの物語を刻んでいる。しかし私が生まれた時には、牛車水はすでに年老いていた。／子供の頃、父の肩車越しに眺めた、目も眩むような様々な屋台の光と喧噪は、目に焼きついていて、今になって思うのは、階段の下にうずくまって静かに煙草を吸っている老人や、二階の窓から、階下に往来する人込みをぼんやりと見つめている老婆に、当時どうして気付かなかったのだろうかということだ。幼い故に、父の深い思いに溢れた眼差しさえ気付かなかった。／歳月とは、この時代から忘れられた世界では、負担である。南洋に渡り開墾に従事した苦勞、苦力として売られてきた悲惨、女達の青春や「紅頭巾」(客家人女性労働者、赤い頭巾を被っていた)の勤勉で力強い労働、日本占領時代の痛苦や戦後の混乱、そして新興国家の成長に従い、こうした数多くのドラマの世界であった牛車水も徐々に年をとった。歳月の累積は、古い建物では支えきれない重い負担だ。牛車水の身の上は、殯儀館で年老いるのを待つ独り者の老華僑に似ている。／歴史的価値、文化伝統、近代化、発展の障害等々、いろいろ言われているが、ほんとうに牛車水の運命を語ることができるのは、牛車水で生まれ育ち、生活する人々であり、彼らにとってはそうした議論よりも、屋台や店の移転、商売の具合といった現実問題の方が切実なのだ。／最後の売り出し、と呼ばかける声も遠のき、

気付くといつの間にか静かな路地を歩いていた。／小さな老婆が、よろよろと歩いて敷居を跨ぎ、薄暗い部屋の中に入って行った。古い木製の扉が閉じられ、ギーッと響いた。それはあたかも歳月の敷居のようであった。屋内は彼女の時代、屋外は現在。古い牛車水と、十九才の私を隔てているかのようであった。衝動的に、私はまた賑やかな通りに向かって戻って行った。

梁文福の牛車水の追憶と感傷は、やはり中国文学の「辺縁」では有り得ない。正しく独自性の表現であり、シンガポール人の感性と言うべきである。

おわりに

華文文学研究の興起は、中国の改革、解放政策と台湾、香港及び華人世界の経済的成功を基とした中華経済「圏」的世界の形成過程における動態の一つの相である。中心にある動力は、中華文化の共有と共感、或は中国人としてのエスニシティである。それが各地の個別の問題を越えて、華文文学世界を構成する求心力であり、それはまた中華経済「圏」的世界の求心力と共通する面を持つ。すでに十年余を経過した台湾、中国の華文文学の研究、及びその間の華文文学世界の状況は、中華「圏」の求心力の渦中であって、華文文学世界の体系化にはほど遠い段階である。

渦中にありながら「華人文学」という方向も示されているが、その将来性は予測しかねる。多様な創作が行われている華文文学世界の等質性を示す「華文」という枠がはずされるとすれば、求心力の意識的共感のみが枠として残ることになる。王氏の言う「華人文学共同体」なるものが可能かどうか、これもカオスの中にある。ただ華人人口の規模からみても、中国、台湾、香港に次いで、東南アジアの華人世界は華文文化の第三の軸と言える。また同時に中華文化伝承の第三の中心と言うこともできよう。とすれば、「中華経済圏」的世界が実体化するにともない、「中華文化圏」的世界が描かれても不思議ではない。ともあれ、日本においても海外華文文学の研究は、東アジア地域研究の一つの課題となって現れている。

注

- 1) 渡辺利夫、『アジアの新潮流』、中央公論、1990年、70ページ。
- 2) 天児慧、「地域主義をめぐる政治力学」、(丸山伸郎編『華南経済圏』、アジア経済研究所、1992年)、71ページ。
- 3) 刘永焯、「中国近年的东南亚研究」、『暨南学报』第四期、1987年、35頁。
- 4) 同上、41頁。
- 5) 林金枝、『近年中国大陸華僑史研究的回顧與展望』、香港大学當代亞洲研究中心、1986年、1頁。
- 6) 同上、1,2頁。
- 7) 同上、2,3頁。
- 8) 拙稿、「東南アジア華人世界のフレームワーク」(『アジア研究』40巻1号掲載)の中で詳細に論じた。王氏の概念では、中国の政策的意図が波及することのできる新たな政策領域、即ち香港、マカオ、台湾同胞華僑・華人によって形成されている「経済、政治の循環領域」として、中国南岸部及び華僑・華人を通して、ヨーロッパ、アメリカ、日本、東南アジアにまで及ぶ地理的世界が描かれている。内政、外交が交錯する定義し難い複雑な政策領域だが、中国はそこに「現代化」の契機を見出している。

- 9) 兼加、「国際性華人社団影響日増」、『華人』第135期、1992年、12頁。
- 10) 『中華民國各大學研究所有關東南亞研究博士碩士論文摘要彙編』、中華學術院南洋研究所、民國72年、2-8頁。
- 11) 鄭竹園、「大中華共同市場的構想與實踐」、『民報』8月号、1992年、60,61頁。
- 12) 同上。
- 13) 潘亞暉、「国际共研学术、相互促进提高」、(『台湾香港与海外华文文学論文选』、海峡文芸出版社、1988年)、410頁。
- 14) 陈若曦、「马华女作家任重道远」、『四海』、14、1992年、195頁。
- 15) 星州日報、1992年12月14日。
- 16) 同上。
- 17) 許以豐、「華文寫作與華文教育」、『亞洲華文作家』第八期、民国75年、3頁。
- 18) 同上、4頁。
- 19) 同上。
- 20) 楊小雲、「亞洲華文作家使命」、『亞洲華文作家』第七期、民国74年、48,49頁。
- 21) 陳紀滢、「亞洲華文作家努力的方向」、『亞洲華文作家』同上、4,5頁。
- 22) 林婷婷、「寄望亞華作家」、『亞洲華文作家』第八期、前掲、24,25頁。
- 23) 同上。
- 24) 前掲、「亞洲華文作家努力的方向」、3頁。
- 25) 翁光宇、「台湾香港文学学术讨论会」、『中国文学研究年鑑』、1983年、262頁。
- 26) 秦牧、「打开世界華文文学之窓」、『四海』、1986年、2月、3頁。
- 27) この討論会は、広東省社会科学院、中国当代文学学会、深圳大学、暨南大学、華東師範大学、厦門大学等、20の機関によって開催された。
- 28) 潘亞暉、前掲、405,406頁。
- 29) 同上、413頁。
- 30) 祭師仁、「第一届东南亚华文文学检讨会綜述」、(『东南亚华文文学与中国现代文学』、厦門大学出版社、1991年)、225頁。
- 31) 同上。
- 32) 文坛資料、『四海』、14、1992年、143頁。
- 33) 前掲、「第一届东南亚华文文学检讨会綜述」、228頁。
- 34) 同上。
- 35) 潘亞暉、「论香港文学的發展及其特性」、『暨南學報』第三期、1993年、112-121頁所収。
- 36) 梁文福、「辺界人」、『最後の牛車水』、FIRST HARVEST PRODUCTION、1988、58-64頁所収。
- 37) 拙稿、「マラヤ華人文芸の定着化」、『三重大学人文学部文化学科研究紀要』第四号、1987年、69-84頁所収。
- 38) 星州日報、1991年、5月4-6日、11-19日。
- 39) 黄錦樹、「馬華文學全稱之商榷—初論馬來西亞的華文文学與華人文學」、星州日報、1991年、11月9日、22日。
- 40) 王潤華、「展望二十一世紀的世界華文与華人文學」、『新加坡作家』三月号、新加坡作家協會、1992年3月。